

I 〈3.11〉後—人間関係を問い直す After 3.11: Repeat Questions to Human Relations

人間の絆の根底を考える —大災害（3.11）を背景にして— What is the Basis of Human Bonding? : Concerning the 3.11 Disaster

岩田 靖夫

IWATA, Yasuo

1 大災害はなぜ起こるか

なぜ、大災害は起こるか。それは、宇宙の進化展開の一齣だからである。宇宙は、137億年前のビッグバン以来、超高温状態において、さまざまな核融合反応や核分裂反応を繰り返し、無数の星雲を生みながら膨張を続けている。わが地球も、この宇宙の進化のプロセスの中で、46億年前に、超新星爆発の際に撒き散らされた塵が凝集して出来たものである。その塵には放射性ウランなども含まれていた。放射性ウランは、地球の誕生時から今日に至るまで、地球の内部で原子核の崩壊を起こしながら、地球に熱を与えている。初期の地球はマグマの海であり、高温であったが、やがて水に覆われるようになって、地球表面が冷却されて地殻が形成された。また、大気圏と磁気圏、さらには、オゾン層の生成により宇宙から飛来する強烈な放射線や紫外線が遮蔽され、この上下の防壁の生成によって、地表で生物が生存できる温和な星になった。

ところで、この進化のプロセスの中で、38億年前に、様々な偶然の結果、地球が温和な星になり、

放射性物質が地表から消え、生物の誕生が可能になった。この時、物理法則に従った宇宙の正常な運動が大災害という意味を帯びるに至ったのである。地球は現在でも勿論宇宙の運動のプロセスのうちにあり、地球の中心にある燃えるマグマを覆っている地殻（プレート）は運動している。地球は全体として幾つかの巨大な地殻に覆われている。これらの地殻の弱い地点からマグマが噴出すれば、それが噴火である。地殻と地殻が分離してゆけば、たとえば、その真ん中に大西洋海底山脈というマグマの巨大な噴出が生じ、両方の地殻は次第に遠ざかってアメリカ大陸とアフリカ・ヨーロッパ大陸を生成する。あるいは、インド大陸を乗せている地殻がユーラシア大陸を乗せている地殻と衝突すれば、海底がせり上がってヒマラヤ山脈を生ずる。あるいは、日本列島を乗せている北アメリカ・プレートの下に、列島の東側にある日本海溝という裂け目のところで太平洋・プレートが沈み込んでいる。この沈下によるプレートとプレートとのズレがその歪みに耐えかねて反発すれば、3.11のような巨大地震が起こる。しかし、

これらの出来事はすべて宇宙の生成進化の一環であることを、銘記しなければならない。ここには、なんの悪意もなければ、善意もない。ただ、宇宙が法則に従って運動しているという事実があるだけである。すなわち、宇宙がコスモス（秩序）であることの証明が現れただけのことなのである。

こうして、様々な偶然の結果、地球は生物の生存に適する稀有に温かな星になったが、それでも、しばしば、過去の、あるいは、未来の、大変動の残像もしくは予兆のような運動を起こす。地球上においても3.11程度の災害とは次元の異なる巨大な大災害の例を挙げれば、6500万年前にメキシコのユカタン半島に直径10キロメートルの巨大隕石が落下したが、その衝撃で舞い上がった厚い有毒な粉塵で地球全体が長期間覆われ、太陽光は遮断され、1億8000万年地球を支配した恐竜を始め殆どの大きな生物が死滅した。その衝突のエネルギーは現在地球上にあるすべての核弾頭の爆発の一万倍と推定されている。このような出来事は、今のところ人間がそれを予知できないだけのことであって、いつでも起こりうる。それが、人間との関係において、大災害と呼ばれるのである。3.11もその小さな一例に過ぎないのである。

この場合、なぜ、ある人々が大災害に遭遇して横死し、他の人々はそれを免れるか、という問題については、古来、様々な説明が行われてきたが、先ごろ退位したローマ法王ベネディクト16世が言ったように「分かりません」と言うのが、正直な発言であるだろう。

さて、人間が惹起する戦争という大災害については、本論考の主題外であるから、ここでは措く。そこで、自然的な大災害にどう対処するかであるが、とりあえず、本題である「人間の絆」の問題に入る

前に、先ず、常識的対処について述べる。それは、あまりにも当たり前のことである。すなわち、人間の現在所有する科学技術力を総動員して、大災害に対処するという以外にはない。たとえば、天文学をより精密にして、地球に衝突しそうな隕石や宇宙の浮遊物を探知して衝突回避の工夫を考えると、か、気象学をより精密にして、地球温暖化が地球の気候や砂漠化に及ぼす影響をより正確に認識しそれへの対処を考えると、か、地震学をより精密にして、地震や津波の予知をより正確にすると、か、もう少し日常的な話にすれば、岩盤の堅固な高台に居住地を移転すると、か、家屋の耐震構造をより丈夫にすると、か、防潮堤の構造をより柔軟に考えると、か、大津波の時の逃走路を整備すると、か、そのようなことである。しかし、このように、物理的に大災害に備えても、それを完全に防ぐことはできない。当たり前である。宇宙のエネルギーの運動に対して、科学技術力がそれを統御できる、と考えること自体が滑稽なのである。不運にも、そのような宇宙の運動に遭遇した場合には、越後の大地震の際に、慌てふためく村人に対して、良寛が言ったといわれる言葉を諦念の悲しみとともに噛み締める他はないだろう。「災いに遭うときには、災いに遭うのがよく、死ぬときには、死ぬのがよいのだ」。

2 人と人との絆

大災害は宇宙の進化のプロセスを動かしている物理法則に従って必ず、しかも、何度となく、人間を襲う。人間は科学技術力によって大災害による被害を防ごうとするが、所詮、それは程度問題である。地球自体が、人間の築いたすべての文化もろとも、遠からず消滅するのである。現在、水素爆発によりエネルギーを放出している太陽は、水素を燃やし尽

くした後、ヘリウム爆発へと移行し、エネルギーと体積を巨大化して、いずれ、他の諸惑星もろとも地球をも呑み込む運命にあるのである。このような宇宙的情況の中で、人間は、奇跡的偶然によりもたらされた宇宙時間のうちの僅かな一息の間の中で、

「いかに生きるべきか」という問いに直面させられているのであり、大災害はこの問いを剥き出しにわれわれに突き付けた、と言えるであろう。

この問いに対する筆者の答は、「今、ここで、人は人を愛することにより、災いと苦しみを克服し、他者と共に生きること自体が生究極の意味である、と自覚する」というものである。津波の惨状に遭遇して、肉親を失った人々の悲しみと絶望は、われわれその苦しみを背負わなかった者の胸をも締め付ける。富や名誉などは言うもおろか、なにか素晴らしい仕事を成し遂げたということさえ吹き飛んで、ただ生きているということの絶対的な「肯定（喜び）」がわれわれの心に湧き上がる。

大災害に遭遇し、家も富も一切を奪われて、人間は本来なにももたない裸の存在であったことを突き付けられた。そのとき、人は人に自己をありのままに露出して、すなわち、何者でもない自己を露出して、「助けてくれ」と叫び合った。極限の無一物、裸一貫が人間のありのままの姿を見せ、そこで、人と人は信頼と愛によって助け合った。津波で流されてゆく母親が、救われたわが子に向かって、「生きるんだよ」と叫んで波間に消えていったという。

すべてを失った人々が避難所で身を寄せ合い助け合っている姿、外国からさえ人々が助けに来た姿——北方四島の帰属問題で関係が冷えていたロシア、尖閣諸島の同じ問題で険悪な関係に陥っていた中国、これらの隣国も救援隊を送ってくれたニュースを（戦略的互惠関係などという利己心むきだしの言葉

によってではなく）、人間の真心の現れとして虚心に受け止めなければならない——ここに人間の生の根源の姿がある。

現代社会は、科学技術の発達と個人主義の蔓延により、「人間は一人でも生きてゆける」という思想を流行らせている。この大災害は、それが本当ではないことを確証した。人は、大昔から、人との絆によって生きてきたのである。死ぬときも、死んだ後も、人は他者との握手（絆）の中で、死んでゆくのであり、供養されるのである。津波を逃れた被災者が、津波で押し流された墓石を立て直し、先祖の霊を供養し、また、遺体の揚がらない肉親の霊に読経する姿は、人間がいかに他者との繋がりの中で生きかつ死んでいるかを、示してあまりある。この大災害は、人間の存在の根源にある、この世とあの世を包括した「他者とのつながり」という「優しさの輪」を、人間の存在の根底として紛れもなく見せたのである。

3 認識の彼方の者—レヴィナスの思考から

前章までで、大災害襲来の必然性（第一章）と、それに遭遇した人間が相互に駆け寄って生と死を守ること（第二章）を確認した。そこで、次に、苦しみの中でなぜ見知らぬ人々でさえ助け合うのか、その人間の絆の根底を考えよう。

さて、人間とは先ず存在欲求（conatus essendi）である。人間は自分の外部にある動植物を自分の中に取り込み、消化し、同化し、自分を太らせて存在を維持拡大しようとする。さらに、もろもろの事物を加工し道具として利用して、自分の生の安全快適を確保しようとする。この時、人間の自己拡大の力の根本は認識（comprendre）である。認識（理解）するとは、このフランス語が示しているように、

「まとめて取り込む」ということなのである。すなわち、認識とは、物事を普遍概念（concept）によって一括し整理統合することに他ならない。この普遍化によって、認識は個々の存在者からその固有性を奪い、それを普遍概念という中性の媒体の中に溶解することによって同化吸収可能な素材にしてしまうのである。知られたものは、知ったものの中に吸い取られ、知ったものの道具になる可能性の下におかれる。

だが、それでなにか不都合があるのか。自動車は一から十まで自動車であって、その中にはなにか一つ秘密はない。エンジンから、伝動装置から、自動車の構造はなにからなにまで知られ尽くしている。それだから、安心して自由自在に操縦できるのである。飛行機でも、新幹線でも、なんでも、道具は知られ尽くしていなければならない。なにか知られていない秘密を内部にもった機械などが存在したとしたならば、そんなものは危険で使えない。こうして、道具の世界は、一から十まで知られ尽くした、そういう意味で、理性が完全に自家薬籠中のものにした、全体化された世界なのである。

こうして、理性が世界を理解し尽された観念として己の掌中に収め、世界を道具化し、それによって世界を支配したとして、それでなにか悪いのか。事実、科学技術の止めどない進展は、世界の道具化に向かって驀進しているではないか。しかし、この道具的理性の驀進は、もしかしたら、人間と地球の破壊への道かもしれない、という予感にわれわれは襲われている。

なぜなら、対象化してはならないもの、道具化できないもの、すなわち、認識できないものが存在するからである。それはなにか。それは人間である。しかし、人間も物質の塊である限り認識の対象では

ないか。生物学や医学は人間の身体構造やその素材を解明し、人間を蛋白質やカルシウムや遺伝子などの働きによって説明し、社会学も経済学も政治学も人間の行動様式を調査分析し、人間の動き方をコンピュータや発電機の動き方のように解明し尽くそうとしているではないか。

だが、この人間の対象化は根本的に挫折する。なぜなら、人間は否定の力（自由）をもつからである。ある人を徹底的に調査し、その遺伝子、出自、性質、能力、身体的特徴、学歴、職歴、人間関係、などを調べ上げ、「あなたはこれこれこういう人だ」と断定した時、その人はそれらの調べ上げられた性質の塊を置き去りにして、「否」と言い、性質の集合の背後に「否を言う者」すなわち、「性質なき純粋なる自己（主観性）」として立ち現れるのである。それが、人間が個体である、という意味である。

もしも、人間が性質の集合体ならば、個体などというものは存在しえない。「かけがえのない者」などは存在しえない。すべての人は物質的には多かれ少なかれ同質の構成物であり、したがって、代替可能な労働力であり、自動車のように故障すれば部品を交換しながら暫くの間走り、やがて修理不能になれば、廃棄される物にすぎない。それが、人間の全体化であり、その全体化を現実に行なったのが、老人や精神障害者や病人や子供を役に立たない事物としてガス室に直行させた、ナチスの強制収容所であった。

それゆえ、人間が「かけがえのない唯一者」であるということは、人間が対象化できず、認識できない、ということと同義である。私がある人と関わりをもつとする。その人が私にとって他者である限り、その人はいつでも私に「否」を言いうるのでなければならぬ。そうではなく、その人がいつも私の思

い通りに動くとするれば、その人は他者ではなくて、私の奴隷であり、私の道具であり、私の一部分なのである。この意味で、私と他者との間には、絶対の断絶（深淵）が存在する。断絶が存在するから、人間は相互に他者なのであり、各自が犯すべからざる尊厳をもつのである。

4 傷つき易さ

他者は認識できない者、「否」を言いうる者、自由な者である。この意味で、他者はいつも私の手の届かない高みにいる。他者は、隣人でありながら、私が同化吸収できない者として、無限の彼方にいる。他者と私との間には深淵があり、この深淵を埋めることは、他者を殺しても成就しない。殺したとすれば、それは同化できなかった、ということの証明に他ならない。それゆえ、他者は、無限に私を超える者として、私に対面しているのである。

このような他者と対面して、私は存在する。このことに、なぜという「いわれ」はない。それが根源的事実であるからである。

それゆえ、他者と関わる時、私は機械を操作するように、相手を自分の計画に従って動かすことはできない。そういうことができたならば、相手は他者ではなくて、私の奴隷であり私の道具なのである。すなわち、他者に対しては、私は呼びかけて、応答を待つ他はない。その意味で、他者との関係は、いつでも一方通行の善意の奉獻でしかありえないのである。この呼びかけに他者が応えてくれたならば、その時、人と人との真実の関係が生まれ、人と人との絆が本当に現れるのである。

ところで、この神にも比すべき無限の高みにいる他者は、同時に、死に曝された弱者でもある。他者は、能力をもち、体力をもち、財産をもち、社会的

地位をもち、業績をもち、化粧をし、威厳をつくろい、力ある者であるかの如くに沢山の衣装に身を包んで現れるが、実は、「私を孤独と死のうちに見棄てないでくれ」と叫んでいるのである。大災害という運命の打撃は、人間のこの真相を露出させたのである。レヴィナスはこの真相を「顔の裸」と表現する。顔は、人間を集中的に表現する場所である。それは、「覆いのない空虚」、「むき出しの裸」である。顔は、人間が本来なにもでもない「無」であることを、その空白によって露出しているのである⁽¹⁾。この空白の無限の高さが、不在の神の痕跡 (trace de l'absence) なのである。

さて、他者との関わりとは、「助けてくれ」という他者のこの呻きに応答することである。この応答は認識ではない。道端に誰かが傷ついて倒れている時に、思わず駆け寄って助け起こすのは、自分の中から自分の意識を超えて到来する衝撃 (affection) が私を駆り立てるからである。この衝撃をレヴィナスは「傷つき易さ (vulnérabilité)」とか「感じ易さ (sensibilité)」とか呼んでいる⁽²⁾。それは、人間が人間を対象として認識し、判断して、行動を起こす、ということではない。相手が誰であろうと、判断 (志向性) 以前に、苦しむ者にとり憑かれ

(obsédé) 共苦する (sym-pathie) 私の志向性に逆行する (à rebours de l'intentionnalité) 他者からの衝撃だからである⁽³⁾。それは、誰かが溺れかかっている時に、自分が泳げるかどうかを考えずに、水に飛び込むほどの衝撃である。そういうことをするのは狂人だ、と言うならば、人間のうちには、偶然出遭った他者の苦しみに己を忘れて「同情 (共苦) する」狂人的崇高さがあるのだ、と言うべきであろう。ここでレヴィナスの言うことは、孟子の言う怵惕惻隱の心と同じであろう。子供が井戸に落ちかか

ったとき、我を忘れて駆け寄るのが人間である、と孟子は言う。このとき、人から誉められようとか、見殺しにすれば汚名を買うだろう、などと思い巡らす人はいない、と孟子は言う⁽⁴⁾。

では、他者と私との間には深淵があるのに、なぜ、そういうことになるのか。

5 自己のなかの他者

他者と私との間には深淵がある。他者は私の道具にならない。他者を同化することは不可能である。然るに、その無限に高い他者が死に曝された弱者として救いを求めて叫ぶとき、私は逃れる術もなくその呼びかけに巻き込まれ、それに応答 (répondre) せざるをえない。それが、責任 (responsabilité) を負うということである。レヴィナスの言う責任とは、根本的には、私が勝手になにか悪事を犯したから、その責めを私がとる、というものではない。そうではなくて、私がなにかをしようがしまいが、それとは関わりなく、偶然遭遇した他者から否応なしに到来する救助への叫びに応答することなのである。それは、『聖書』(ルカ、10 章) の物語に出てくる、あの、強盗に襲われて半死の状態で倒れていたユダヤ人に偶然出くわしたサマリアの商人の振る舞いなのである。では、なぜ、そういうことになるのか。

それは、他者がすでに自己のうちにいる

(l' autre dans le même) からである。他者は、私が認識によって構成しうるものではない。そのような構成物は私の観念であって、現象学の他者論が試みたように、どこまでその観念を精緻にしても、他者には届かない。その意味で、他者は観念を超えている。他者との接触は、認識という志向性の働きの産物ではなく、逆流する志向性とも言うべき「私の意識以前」から到来する衝撃の受動であり、傷を

受けることであり、その受動や傷は、他者に直面する以前に、すでに、私のなかで起こっているのである。

この事態の具体的な場合を、レヴィナスは、母性 (maternité) に見ている⁽⁵⁾。母親は妊娠した胎児を自分の所有物として処分することはできない。胎児は母親の自由にならない絶対の尊厳をもつ他者として母親のうちにいる。それゆえ、同時に、母親は胎児の苦しみを逃れる術なく背負わなければならない。胎児が病に苦しめば、自分も病に冒される。自分が酒や麻薬やウイルスによって病気になれば、それによって胎児も病に犯される。喜びも苦しみも健康も病気も、すべて、逃走の可能性なしに、母親は担い続けなければならない。この母と胎児との関係が、私と他者との関係の根源的原型である、とレヴィナスは考えているのである。それは、自分が自分自身であることから絶対に脱出できない逃走不可能性 (sans évasion) と、ほとんど同じ逃走不可能性である。

だが、偶然出遭った他者の苦しみに私が巻き込まれるときに、私は一体何時この他者と関わり合ったのだろうか。私はかれと、かつて出遭ったこともないし、話したこともないし、ましてや、約束したこともない。しかし、私は有無を言わずにこの偶然出遭った見知らぬ他者の苦しみに巻き込まれ、とり憑かれ (obsédé)、先に述べたサマリアの商人のように、半死半生のまま置き去りにされた他者に駆け寄り、傷の手当をし、宿屋にまで背負い込み、翌日、^{あるじ}主^{あるじ}に後々の治療費まで託して、旅立つのである。

苦しみを介しての、私と他者との有無を言わさぬ連帯は、想起可能な過去の記憶のどこをさがしてもその発端は見当たらない (anarchie)。すなわち、私と他者は、現在に連続しない闇の切断を介して、

すなわち、記憶を絶した過去 (passé immémorial) において、連帯していたのである。この事態をレヴィナスは「断絶的時間 (diachronie)」における「関わり」と言う。

(レヴィナスにおいて、神は現象世界に決して姿を現さない。もし神が現象世界に現れたとすれば、神〔超越〕は自己を消去したことになるからである。この意味で、かれの哲学は、ある意味で無神論である、とも言える。真の神は「知られざる者 (incognito)」であり、繊細な苦しみの、しかも沈黙の声として、隣人の顔を通り過ぎた痕跡 (trace) として、仄かにその後姿を示唆するだけである。顔の空白、無力、困窮が、不在の神 (absence) の痕跡である。「顔の貧しさ」と「無限 (神)」との連帯は、私の側からの能動的な関わり合いに先立って、隣人の苦しみが私の責任に課されてくる力のうちに、書き込まれているのである。一人の苦しむ他者が、直接的には絶対に出現しない「かれ (Il, Illéité)」との間に入って、私を応答という責任へと呼ぶ。自己同一者 (Identité) として自分を守ろうとする存在欲求としての私に加えられたこの衝撃が、主観性 (subjectivité) の秘密を下僕 (sujet) として示している。レヴィナスにおいて、主観性とは他者を認識し同化し自己同一を強化する能動的実体ではなく、ひたすら他者へ奉仕する下僕として「存在のかなた」へ自己解体してゆく憧れ (désir) なのである。それゆえ、神とは、路傍に横たわる瀕死者の「助けを呼ぶ」かすかな声である。その無力と屈辱が神の栄光である。)

さて、以上のユダヤ教的前提を取り外しても、見知らぬ人同士の連帯は、記憶を絶した彼方における、なにか共通の精神的な根源を要請するであろう。それを、人類は神、仏、存在、空、無、タオ、アラー、

ヤーヴェ、ブラフマン、などなど、いろいろな名前と呼んできたのである。現代人にとって、そのような前提は不要であると言うならば、偶然苦しむ他者に遭遇した時、その他者が見知らぬ人であっても、人種、性別、身分、その他において、どれ程の差異 (différence) があろうとも、その他者に「無関心ではありえない (non-in-différent)」という心の疼きが、われわれの心中から吹き上がる (inspirer) ということは、事実である。この事実が人間性のうちに潜む神秘であり、それが人間の絆の根底なのである。

6 公正な社会

人間の絆の根底には、各人の人間性のうちに刻み込まれた他者への憧れ (désir) があり、その基礎にはなにか宗教的な友愛 (fraternité) のようなものが潜むであろう。見知らぬ人でありながら、偶然、苦しむ他者に出遭う時、われわれの心の底から吹き上がる「共苦、同情 (sym-pathie)」の息吹 (inspiration) は、時間を超えた存在の彼方での関わりを暗示している。レヴィナスが、受苦 (vulnérabilité) の無始原 (an-archie) というのは、このことである。

ところで、このような見えない絆に基づいて、この世界の中で、どのような共同体を作るか、という問題になれば、それは具体的に見える正義の社会の建設である。そこで、最後に、アメリカの政治哲学者ロールズの思想に基づいて、この問題の基本原則を述べて、この論考の終結とする。

現代は、多文化・多宗教の共存が不可避の現実となった時代である。すなわち、ある特定の文化、特定の宗教、特定のイデオロギーによって、世界を統一的に統合することが不可能な時代に入ったという

ことである。特定の文化、特定の宗教が自己の絶対性を主張して、相互に争い合う時、人類の未来には滅亡しかない。人類が生き延びる道は、ただ、異なる文化、異なる宗教が相互に畏敬の念をもちつつ、共存する道を探すことしかない。すなわち、寛容（tolerance）の道である。しかし、異なる文化や宗教が共存しうするためには、なにか共通の土俵がなければならない。それらの異なる文化や宗教が相互に戦うことなく認め合える共通の普遍的原則がなければならない。それが、正義である。正義とは、極端に単純化して言えば、「人間が自由で平等であること」を万人が相互に承認する、ということである。しかし、これら二つの原理が、人間が人間であることの印であることには、なんの証明もない。それが、自明の真理だからである。

人間の自由と平等の思想は、遠く古代ギリシアにおけるデモクラシーの創造に始まり、ヨーロッパ中世末期における民衆と王権と教会との三つ巴の権力闘争、それに続く宗教改革、ピューリタン革命、アメリカ独立戦争、フランス革命などの数々の流血の犠牲を経て、ヨーロッパが獲得した、人間の尊厳についての直覚観念である。勿論、東洋にも、人間の自由と平等への無数の闘争があったことは、言うまでもない。ヨーロッパの歴史はそれを典型的に顕在化している、というだけの話である。いずれにしても、それは、人類の血まみれの経験に基づく直覚観念なのである。

では、自由の原理とはなにか。自由の原理とは、基本的人権に即している限り、人間はしたいことをする最大限の権利をもつ、ということである。勿論、この権利はすべての人にとって同様に成立していなければならない。自由であることは、独立の人格であることと同じであるから、この原理はいかなる構

造の社会においても守られなければならない最優先の原理である。

ところで、基本的人権とはなにかと言えば、思想・信仰の自由、言論・出版の自由、婚姻の自由、結社の自由、職業選択の自由、居住・移動の自由、国籍選択の自由、その他であるが、これらの権利は、人間がしたいことをして生きるための、基本的条件として立てられているのである。人間は各自したいことをして生きなければならない。アリストテレスは「幸福とはアレテー（各人に固有の優れた能力）に即した生命の活動である」^⑥と言ったが、これが現代では常識となった「自己実現が幸福である」という思想の原型であり、ロールズもまた「自由の原理」を最優先原理とすることによって、この思想を生すべての活動の究極根拠として継承しているのである。

すなわち、自由の原理とは、自己実現の原理であり、自己実現とは、個人としては自分が人生で何をしたのかを自覚的に確立し、その実現のために理性的・倫理的な努力を致す、ということである。同時に、人間は共同体的動物であるから、自分が属する国家社会の基本的な権力構造を認識し、これを正義にかなった（すなわち、人間の自由と平等が実現された）社会にするべく自ら行動する公共的な倫理的実践能力をもつ、ということである。この二つの能力が共に働いている時、人間は本当の意味で自由なのである。

こうして、正しい社会は各人が自由に活動し、自分の選んだ目的を追求し、それを実現しうる社会でなければならないが、そうすると、人間にはいろいろな運命的条件の違いがあるから、そのために各人の能力の発揮の成果に差異が出てくる。その結果、教育や職業選択の機会を万人に等しく開放してい

も、必然的に社会的地位や財産において格差が生まれてくる。しかし、このことを避けるために、人間の自由を制限してはならない。ここに、自由を最優先原理としながら、平等をどのように実現するか、という困難な問題が生じてくるのである。

社会主義社会の挫折から明らかなように、人間の自由を制限すれば、人は自主独立の人生を生きる自尊心を失い、その結果、生きる活力を失い、社会は全体として疲弊する。それでは、どうすればよいか。ロールズの格差原理 (difference principle) とはこの問題への対処である。すなわち、人間の自由な活動は社会的弱者の利益になるという条件の下においてのみ、その存立を許される、というのがこの原理の内容である。

すなわち、自由競争社会において、大きな能力によって大きな成果をあげた者は、個人であろうと国家であろうと、運命的な悪条件のために成果をあげえなかった弱者にその成果 (富, 知識, 技術, 教育, その他) を奉呈しなければならない、という思想である。それは、国家間であれば、先進国による途上国への (かれらが自立しうるまでの) 食料, 医療, 知識, 技術, 教育制度, 社会的下部構造, その他の援助であり、自国内における人々の関係であれば、累進課税, 相続税, 福祉制度の充実, 年金制度の整備, 国民皆保険, その他による, 社会的強者による社会的弱者の保全である。すなわち、地球的な規模における福祉社会の建設である。

この時、強者による弱者の保全を、慈善行為と考えてはならない。なぜなら、能力は各人に偶然 (contingent) 与えられたものだからである。それゆえ、能力を私する理由はないのである。すなわち、能力は個人のものではなく、社会の共有財産 (common assets) である、と考えるべきだ、とい

うのがロールズの考えた福祉国家を建設する哲学的基礎である⁽⁷⁾。この、各人の能力の社会的共有と、前章までに述べた、他者の苦しみへの「共苦」の感受性が、人間の絆の根底なのである。

注

(1) E. Levinas, *Autrement qu' être, ou au-del' a de l' essence*, *Phaenomenologica*, 54, Martinus Nijhoff, 1974, p. 112ff.

(2) *ibid.*, 94.

(3) *ibid.*, 142.

(4) 『公孫丑章句上』。

(5) *Op. cit.*, p. 95.

(6) アリストテレス／高田三郎訳『ニコマコス倫理学 (上)』岩波文庫, 1971 年, 33 頁。

(7) J. Rawls, *A Theory of Justice*, Harvard U.P., 1971, p. 101.

岩田 靖夫 (東北大学名誉教授)